

曲目解説

文・宮山幸久

ポーランドの芸術分野は、1890年代から独立を達成した1918年にかけて、当時ヨーロッパ最先端の精神や技法を積極的に採り入れ、民族主義の枠を越えた創造が指向された。「若きポーランド」と称されるこの運動の文学代表がカジミェシュ・テトマイエル、音楽がカール・シマノフスキやミェチスワフ・カルウォーヴィチだった。作曲家たちはワーグナーとリヒャルト・シュトラウスの強い感化を受け、楽しい舞曲ではなくショーペンハウアー的な哲学性や複雑精緻な技法などを通して、急速に近代音楽へと発展させた。

シマノフスキは主にヴァイオリン作品が知られるが、創作の半数以上は声楽曲だった。作品2の《6つの歌》は1900/02年、彼が18～20歳の所産で、すべてテトマイエルのポーランド語詩に基づく。若書きとはいえ文才にも恵まれたシマノフスキの深い内容理解と、ワーグナーやスクリャービン風の鋭敏な感性がすでに現れている。

カルウォーヴィチは高名な言語学者を父に持ち文学と山を愛したが、登山中雪崩に遭い夭折し、その後、展開させ得た実りと未来を失った。彼の歌曲は1895/96年、19～20歳の所産で、作品1と作品3に含まれる。初々しい感覚に満ちているが、後年「若気の至り」と卑下したという。いずれもポーランド語詩で、今回歌われる9篇では「おだやかで明るい黄金の日々を」「わが魂いたく憂いて」「話つづけて」「暗く穏やかな海の上で」「広い、広い海原を」「錆びた木の葉を」がテトマイエル、「永遠の夜がくる前に」がズィグムント・クラシンスキ、「私のために泣くのはよせ」がヤン・イヴァンスキ、「夜の光を浴びて」はハイネのドイツ語詩をマリア・コノプニツカがポーランド語訳した歌詞による。

若きシマノフスキとカルウォーヴィチは熱烈なワグネリアンで、ことに《トリスタンとイゾルデ》に心酔した。《ヴェーゼンドンク歌曲集》は1857/58年、ワーグナーのパトロンだったヴェーゼンドンクのマティルデ夫人（当時不倫関係にあった）のドイツ語詩に作曲された。《トリスタンとイゾルデ》の予告的作品で、第3曲「温室にて」は第3幕前奏曲に、第5曲「夢」は第2幕の二重唱に転用されている。

「若きポーランド」の作曲家たち共通の師ズィグムント・ノスコフスキはスタニスワフ・モニューシュコ門下だった。オペラの大家モニューシュコはピアノのショパンと並びポーランドの二大巨頭とされる。代表作の歌劇《ハルカ》はコニエチュニーも出演したアン・デア・ウィーン劇場公演の映像が発売されている。今回の3篇はプロ、アマチュアを問わずレパートリー向上のため作られた267曲から成る《家庭愛唱歌集》に収録されている。

「爺と婆」は老夫婦がお互いに先立たれたくないと言い合いながら、いざ死神の登場に本性を表す滑稽な内容。「爺さん伍長」は、ナポレオンのモスクワ遠征の老伍長の奮闘を描くフランスのピエール＝ジャン・ド・ベランジェの詩をヴワディスワフ・シロコムラがポーランド語訳したもので、「共通の敵」への気持ちを重ねている。「コサック」は異郷で瀕死の若いコサック兵が、両親へ埋葬はウクライナ人の手以外は嫌だと切望する。

ヘンリク・チシュはまず何よりも指揮者、それもペンデレツキのスペシャリストとして知られた。加えて、多くの著書やテレビ・ラジオのクラシック音楽番組の司会など啓蒙面でも活躍した。バスとピアノのための《2つのアリア・ブッフォ》は1964～74年頃の作とされ、自身の詩による。トマト博士が患者のキャベツに葉をすべて剥がさせそうとする第1曲と、つかの間のロマンスを描く第2曲、いずれもチシュのユーモアのセンスを発揮している。